

『宝物入れ』

a2200606遠藤 理栄

●デザインコンセプト

漆の作品は、使ってこそ身近に感じるものと考えて、用途性のある作品制作をテーマとして研究に取り組んだ。用途性のみならず、これまでの自分の考え、思いを表現できるものを制作しようと試みた。

何を表現したいのかということ考えた時、今の自分があるのは、これまでのたくさんの人との出会い、関わりがあったからだ気づかされる。たくさんの人との出会い、思い出を大切に生きていきたい、そうして考え付いたのが蒔絵で装飾された箱である。箱はうちにあるものを保存するだけでなく、思い出も込めることができる。箱の中にあるものを大切にしておくという機能と私自身の今までの出会い、思い出を大切にしたい思いを重ねることができ、表現できると考えた。出会い、思い出は私にとって宝物であるので、その箱を宝物入れとして制作した。

人との出会いがあって、そして別れもある。それを季節の変化で表現しようと考え、季節ごとの花を箱のまわり描いた。たくさんの人と関わって成長する自分の姿を、季節をめぐり飛び立つ鳥に重ね表現した。

●制作工程

- 1、木地制作
- 2、木固め
- 3、布着せ
- 4、目摺り
- 5、一辺下地
- 6、二辺下地
- 7、三辺下地
- 8、下塗り
- 9、錆付け
- 10、中塗り
- 11、錆付け
- 12、上塗り×2
- 13、加飾

研ぎ出し蒔絵;平目粉(4本のライン部分)

平蒔絵;丸粉

螺鈿

金具、蝶番(ベンガラ×2～3、呂色×2～3、銀粉)取り付け



蝶番焼き付け



布着せ



研ぎ出し部分

●考察と感想

実習、卒業研究と箱を制作して、箱の角やラインを性格に出す難しさがわかった。木地を設計することから自分の手で行うことが出来て良かった。箱の木地を補強するための布着せをするのは初めてで、布着せに失敗して布が木地から浮いてしまい、布をはがしてすべて貼り直すこともあった。思っていた以上に大変で、時間がかかった。布着せが完了した時はとても達成感があった。また、自分の不注意で箱を落として角が欠けてしまったりへこんでしまったりと、とても焦ったが、なんとか無事修復することができた。金具や蝶番も自分でデザインすることができて良かった。

2年間漆を学んで手で、作ることの大変さ、難しさを学んだ。漆は手間暇がかかるので、1日に進める工程が限られていて、なかなか短時間では仕上がらないが、その分出来上がったときはとても嬉しい。わからないことばかりで、失敗もたくさんしたが、それも良い経験になった。今後もものを作っていく上で、この経験を思い出して、活かしていけたらと思う。